大人の英語の学び方
～認知科学の視点から～

Learning

今井むつみ（いまい・むつみ）

慶應義塾大学環境情報学部教授。専門は認知科学、言語心理学、発達心理学。1989年、慶應義塾大学大学院社会学研究科後期博士課程単位取得退学。1994年ノースウエスタン大学心理学部博士号取得。語彙の習得・学習のメカニズムを研究しているほか、「学び」についての認知科学の研究成果を教育現場での実践に生かすべく活動している。著書に、『ことばと思考』『学びとは何か――〈探究人〉になるために』（以上、岩波新書）、『ことばの発達の謎を解く』（ちくまプリマー新書）、『言葉をおぼえるしくみ―母語から外国語まで』（ちくま学芸文庫、共著）など。

第11回

フィンランドの英語教育から学ぶ



フィンランド人は世界一英語がうまい国民

2017年にフィンランドで学会があり、初めてフィンランドを訪れた。そこでびっくりしたことがある。誰もが英語がとても上手なのである。ヨーロッパ人は概して英語がうまい。しかしフィンランド人の英語のうまさはヨーロッパの中でも群を抜いている。私が知る限りでは、英語を母語や公用語としない国の中で、世界で最も国民の英語能力が高い国がフィンランドである。しかも、エリート層だけではなく、国民誰もがうまいのである。バスの運転手さんも、電車の車掌さんも、田舎の小さな店の店員さんも、皆、英語を自由に話している。フィンランドにいる間、誰かに英語で話しかけてコミュニケーションが取れなかったことは一度もなかった。しかも、フィンランド語は英語から系統的には遠く、言語としての共通点が多いわけでは全くないのである。

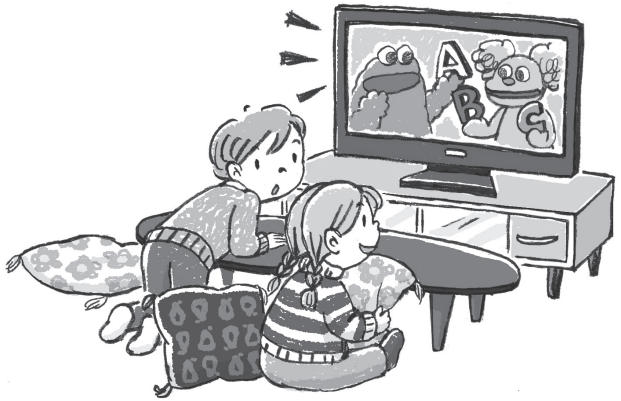
ドイツ語、スウェーデン語やオランダ語はフィンランド語より、ずっと英語に似ている。しかし、ドイツ、スウェーデンやオランダでも、フィンランド人ほど誰でも英語がうまいわけではなかった。店やホテルのフロントなどで、定型的な質問には答えてくれるものの、ちょっと定型から外れたり、突っ込んだ質問をするともう答えてくれないことがよくあった。しかしフィンランドでは、老若男女、大学卒であろうとなかろうと、定型であろうが変化球の質問であろうが、内容的に突っ込んだことであろうが、誰もがしっかりと答えてくれて、深い会話ができる。いったいどんな教育をすればあんなに誰もが英語が自在に使えるようになるのだろうか、と強い興味を覚えた。

教育先進国フィンランド

フィンランドは教育先進国として有名である。経済協力開発機構（OECD）の国際学力調査（PISA）では、全科目で常にトップクラスにいる。特に、21世紀に最も重要だと言われる、「オープンエンドな問題を解決する力」でぬきんでている。世界を驚かせたのは、ヨーロッパの「小国」がPISAで「大国」をしのぐ好成績を見せつけたからだけではない。フィンランドの好成績の背後には、これまでの教育の常識を覆すさまざまなポリシーや実践があることが明らかになり、それに全世界が驚愕したのである。

フィンランドの教育で特筆すべきことは公教育の質の高さである。フィンランドの学校は子どもが学校で過ごす時間が世界で最も短いと言われている。強制的な宿題もない。そして、生徒を成績で順位づけるためのテストもない。いわゆる「進学塾」のようなものは、幼児にも高校生にも存在しない。子どもたち皆が公立の学校に通うのである。

フィンランドで最も大事にされていることは多様な選択肢を行政が提



供し、個人が責任を持って自分で判断して選択をすることだという印象を受けた。保育園でも、とにかく子どもたちが大事なことを自分で決める、ということが徹底していた。先生たちは、子どもたちが自分で決めたことを実行する手助けはするが、直接の手出しはしない。教育のプログラムも、子どもにどのようなクオリティーの教育を提供するかという大きなところでは国がしっかり決める。ちなみにフィンランドは、都市部と都市から離れたいわゆる「田舎」で学力格差が最も少ない国とも言われている。それは、居住地域や親の経済状況にかかわらず子どもが高い質の教育を格差なく平等に受ける権利があるというのが国の方針としてあり、それを実現できているかどうかのチェックも常に行われているのである。

このような方法で、学力、特にOECDが21世紀に最も必要と謳う意味での学力でまさに「世界一」と評価されている。フィンランドでは学校の先生、特に小学校の先生が最も尊敬され、人気の高い職業である。先生になるためには大学の教育学部に受け入れられなければならず、教育学部は医学部と同等に難しい。競争率は10倍以上だそうである。

このようなことを知っていたので、フィンランドの人たちが英語があれほど上手なのは、英語教育がよいからに違いないと確信した。その秘密をぜひ知りたいと思い、昨年9月に再びフィンランドを訪問した。

小さいときからテレビで耳を慣れさせる

フィンランドの教育関係者に、どうしてフィンランド人は英語がうまいのか、と単刀直入に聞いてみた。誰もが真っ先に言うのは、子どもが育つ環境のことである。フィンランドでは、子どもが喜ぶ魅力的なテレビ番組をあまり作らない。人口が少ないからペイしないそうである。しかし、イギリスやアメリカで作られた英語の幼児番組はたくさん放送されている。ヨーロッパでは、もちろん他国で作られたテレビ番組が放送されるのは当たり前だ。しかし、幼児番組を放映するときは、大抵吹き替えをして流すそうである。しかし、フィンランドでは幼児番組でも、字幕はつけるが、吹き替えはしないそうである。つまりフィンランドの子どもたち、特に文字がまだ読めない幼児が魅力的な幼児向けのテレビ番組を見たければ、外国語を何とか自力で理解するよりほかないのである。ちなみに、外国で作られた幼児番組を吹き替えせずオリジナルの言語で流すのが、吹き替えの経費を使いたくないという経済的理由なのか、幼児期から外国語に耳を慣れさせるように意図的にしているのかはわからない。しかし、これがフィンランド人の英語力の高さに貢献しているのは間違いないところだろう。

小学校就学前からの言語教育

フィンランドでは皆、質の高い地元の公立の学校に行くので、日本やアメリカのように、自分の子どもに特別なアドバンテージを与えるための進学塾、幼児教育塾のようなものは存在しない。しかし、幼児教育は非常に重要視している。フィンランドでは幼児教育も公共の福祉、教育の枠組みの中に位置づけられていて、幼児期の教育の目標は国の施策の重要な一部と捉えられている。

フィンランドの現地調査で感心したことは、国の役割と各学校の役割、さらに現場の教師ひとりひとりの役割の違いが明確で、三者がそれぞれを分担し、1つになってすばらしく質の高い教育が実現されていることである。基本的には、大きな目標は国が決めるが、それをどのように実現するのかはほとんど各学校に任せられている。世界で最も教師になるのが難しい国でその難関を突破した能力の高い先生たちが国の指針に沿いながら指導計画を作って実施している。

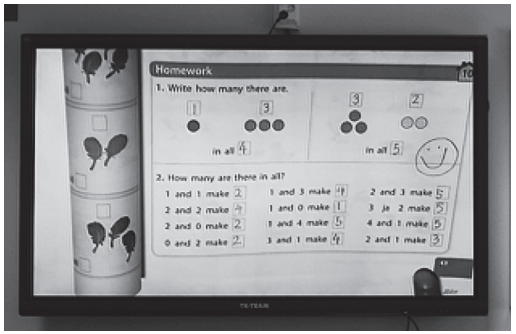
さて、フィンランドの英語教育が大きく成果を上げている要因の1つとして、就学前教育、特に言語教育があることは間違いない。ここで「言語教育」と書いたのは、幼児教育で

力を入れているのは英語教育ではないからだ。フィンランドでは、スウェーデン語とラップ語も公用語であり、多言語の環境が当たり前であり、非常に尊重されてもいる。フィンランド語は国語として最も重視されているが、同時に、多言語の環境もとても大事にされている。私たちが視察した保育園や小学校では、名前から推察して、純粋なフィンランド人と思われる子どもはむしろ少数派だった。アフリカ、東欧、アジア、中東をバックグラウンドとする子どもが多数いた。そういう環境で、英語を共通語にしているのではなく、子どもたちはフィンランド語を中心にしながら、子どもの母語が失われないよう保護者、コミュニティーを交えてサポートが行われていた。

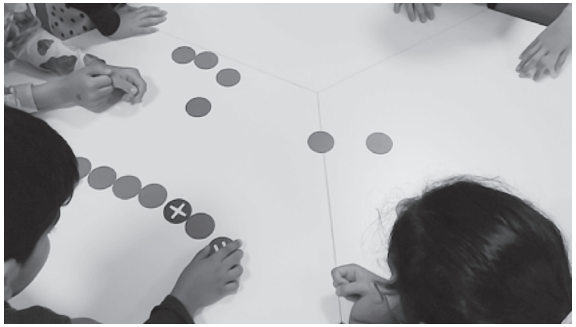
ちなみにフィンランドでは、就学前の幼児教育として言語は最も大事な位置づけにあるが、7歳で学校に入学するまで読み書きは教えない。フィンランド語は日本語のカナと同様、文字と音がきれいに一対一対応しているため、絵本を大人に読んでもらうなどしていると自然に文字を覚えてしまうようである。

さきほどフィンランドは多様な選択肢を提供し、その中から（子どもも含めた）国民ひとりひとりが自分で考え、責任を持って選択することを重んじる、と述べた。言語の教育もしかりである。私が訪問した幼稚園の１つは、スウェーデンとの国境に近いトゥルクという市にあるためか、スウェーデン語を保育のメインの言語にしていた。ほとんどの子どもたちはスウェーデン語が母語というわけではなく、フィンランド語が優勢であるが、スウェーデン語を覚えさせたいという保護者が子どもたちを通わせる幼稚園である。先生は子どもたちにスウェーデン語で話しかけることがほとんどだが、子どもたちはフィンランド語で答えることが許されていて、子どもたちがスウェーデン語の指示がわからない様子を見せると、先生たちもフィンランド語に切り替えていた。

幼稚園の先生たちは、スウェーデン語、フィンランド語、英語のトライリンガルだった。私はスウェーデン語もフィンランド語もできないのだが、幼稚園の先生たちは、保育の指針や実践についての非常に専門的で深い話を英語でよどみなくしてくれた。ただし、英語になまりがないわけではない。外国人の英語とわかるなまりはあるし、ときどき単語が出てこなくて言いよどんだりすることもあった。それでも、話す内容は



英語で行う小学１年生の算数の教科書



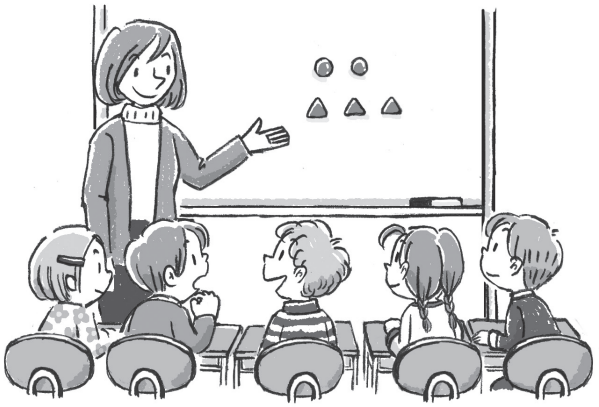
算数の授業中の子どもたちの活動

中身が濃く、高度なことをきちんと話すことができる。そもそも、教育学や発達心理学についても深い理解をしていることがよくわかった。

フィンランドの英語教育成功の秘密は、幼児期から多言語の環境で、大人が必要に応じて言語を切り替えていること、その中で、英語は誰もが流ちょうに話せるために、英語は使えて当たり前で、「勉強しなくちゃ」というような気持ちを子どもが持たないところにもあると思う。フィンランドの子どもにとって、英語は「勉強の対象」ではなく、生活に必要なスキルの１つにすぎないのである。

小学校低学年での英語の導入

フィンランドでは現在、英語は小学3年生から始まるが、今年1月からは１年生からに前倒しされたそうである。トゥルク大学の付属小学校は、新しい教育政策を大学の研究者と連携して前倒しで実験的に施行することになっている学校で、その学校の授業を見学させてもらった。その学校では算数の授業を英語で行っていた。新学期の始まりからまだ数



週間、つまり１年生の子どもたちが小学校に通い始めてまだ数週間しかたっていない時期で、算数と言っても、「赤い○はいくつ？」「△はいくつ？」「緑の○と赤の△を一緒にしたら全部でいくつ？」のように、数を数えながらゲームをするといった活動で、非常に初歩的で、どちらかといえば幼稚園の延長のような内容だった。

すでに述べたように、小学校低学年までに子どもたちは、常に身の回りで使われている外国語の１つとしての英語に慣れている。文法は知らなくても、フィンランド語と全く違う音の響きにも耳が慣れていて、よく耳にする単語は、自分でだいたい意味を推測して知っている。その土台の上に、英語が自然な形で導入されている。

「自然な形」というのは、教科として英語を教えるだけではなく、子どもが状況を推測しやすい算数やハンディクラフト（図工）などのクラスの中で英語を使っている、ということだ。小学校では基本的には１人の先生がすべての教科を担当するので、どの授業で英語を使う、というような判断は先生自身がしているようである。授業は、「さあ、英語を勉強しましょう」という感じではなく、ごく自然に英語を導入し、必要に応じてフィンランド語も交えて進めていく。子どもはフィンランド語で質問してもオーケーだし、理解していない様子があれば、フィンランド語での説明に切り替える、という非常に柔軟なやり方が印象的だった。それも、先生たちが皆、英語が堪能であるというだけでなく、非常に難しい選抜をくぐり抜けて教育学部に入学し、厳しいトレーニングを経て教師になった「達人」だから可能なのだろう。

英語の教科書と授業

算数や音楽、ハンディクラフトなどで英語を部分的に使うことで、英語は「勉強する科目」ではなく、「使うための言語」という認識を子どもの中で育てつつ、英語の授業では、文法や語彙を学習していく。

教科書の各章は子どもの生活に密着した内容である。小学4年生用（現行の制度では英語の学習が始まって2年目）の教科書は“The dream team”というタイトルで、小学4年生の男の子がイギリスで家族や友人と公園で遊んだり、動物園や歯医者さんに行ったり、サッカーチームを作ったり、といったイギリスでの日常生活がかいま見られる対話形式で各章が展開していた。

教科書は、どの会社のもの、そしてどの学年用のものでも、ナレーションやダイアローグが中心のテキストと、文法の練習、単語の学習に主眼を置いたワークブックがセットになっている。授業では教科書を読むというより、ワークブックを中心に英語を使う練習をしていた。小学校では、文法よりも語彙を増やすことを重視していて、テキストに出てくる文はすべて平易でシンプルな単文である。いわゆる「文法」を「文法」として教えるのではなく、日常の状況で使うことを主眼に置いている。日常の会話では普通、関係節を含む複雑な文を人はほとんど話さない。本来、英語の授業は関係代名詞などに多大な時間を使うより、身近なテーマで必要な単語をたくさん取り上げ、それらの単語をシンプルな文で使う練習を徹底的にするのがよいと思っていたが、フィンランドの教科書はまさにそのように作られていた。

語彙を増やすために、ワークブックでは教科書のテーマに関連する単語を集め、それらを使って文を作る練習をするようになっていた。これは認知科学の観点から見るととても理にかなったものである。人は関連する概念をまとまりで学習するほうが、ばらばらに学習するよりもずっとよく学習でき、覚えることも思い出すことも容易である。本連載でしばしば強調してきたように、単語は単独では意味が十分に理解できない。同じ概念分野に属する類似した意味の単語と対比することで意味の理解が深まる。その意味でも、同じ



高校生の英語の教科書 *Kymppi 1 Syksy* より

分野の単語を一度に学習したほうがよい。

教科書で使われている文は構造的には非常にシンプルなものばかりであるが、例えばwhat、how、whereを使った疑問文や過去形、現在進行形、現在完了、名詞の複数形、動詞と数の一致、前置詞など、それがなければ自然な英語にならない基本的な文法は、英語学習初年度の3年生の教科書でもどんどん取り上げられている。この基本文法が別のシーンやテーマを扱う別のチャプターで何度も何度も繰り返し使われている。これも学習の認知メカニズムの観点からは非常に合理的である。あることを学習するには、受動的にわかったと思っていても、すぐには定着しない。定着させるには何度も繰り返し自分で使って練習することが欠かせない。その際、漢字ドリルでよくあるような同じことを何度も書いて繰り返すやり方ではなく、少しだけ文脈やシチュエーションを変えていき、異なる状況で、少し時間的にも間を置いて、すでに学習した内容を何度も繰り返して練習するのが最も習熟に有効である。この原則がフィンランドの英語の教科書ではそのまま実現されているのでとても感心した。

高校での英語の授業

日常の場面で使う英語、つまり話して書くための英語、というスタンスは高校になっても徹底している。小学生用でも、高校生用でも、教科書で扱われるシチュエーションはその年齢の子どもたちの関心事がテーマになっている。日本の高校の英語の教科書は、Readerが中心で、内容も、環境問題や社会問題などかなり高度で、それを苦労して読み解くことに主眼が置かれている。その構文や、かなり専門的な単語を使って文を作る練習問題があったりするのだが、内容が専門的すぎて日常のコミュニケーションにはあまり役に立たない。というより、ふだんの会話で使うとフォーマルすぎてとてもヘンなのである。それに対して、フィンランドの教科書では高校生用でも、日本の高校英語のような、関係節でつながれた複雑な構文はほとんど出てこない。文学や、専門的な論文でしかお目にかからないような単語も出てこない。しかし扱う語彙は豊富で、テーマに関連した単語が紹介され、それに類似した単語もワークブックで紹介され、それらを使ってとにかくたくさんの文を作り、自分で話したり書いたりする、つまり、「受容」ではなく「アウトプット」することに焦点を当てた教育がされているのである。

最終回となる3月号では、学習の認知メカニズムから考えて合理的な英語の学習について、今月紹介したフィンランドの英語教育から考察するとともに、1年間の連載を振り返りながらまとめようと思う。

次号予告

第12回 合理的な英語の学習とは